

『君の臍臓を食べたい』を読んで

弘前市立第二中学校

楠 美 愛 央

みなさんは日々死生観を見つめて生きていますか。
朝を迎えられるのが当たり前だと思い込んでいる私達。そんな当たり前が当たり前ではないということをこの本を読んで知った。

読んだきっかけはタイトルに興味をもったからだ。表紙の華やかな桜とは反対に少し不気味なタイトル。ストーリーが気になったと同時にこのタイトルになんらかの意味が込められているのではと思い、すぐさまページをめくった。

主人公の志賀春樹は病院で「共病文庫」という本に出会う。それはクラスメイトの山内桜良が書いていた秘密の日記で、彼女が臍臓の病気を患い、余命が一年しかないという事実を知ってしまう。

彼女の家族以外で唯一その秘密を知っている春樹。秘密を共有する関係として彼女が「死ぬ前にやりたいこと」に付き合うことになる。焼き肉を食べに行ったり、遠出をしたり。最初は仕方なく付き合っていた春樹だが、次第に自分になり

ものを持つている彼女に憧れを抱くようになった。

彼女と関わるうちに春樹は「人を認め、人を愛せる人間になる」と約束する。桜良を通して少しずつ成長していく春樹だったが、彼女は通り魔におそわれて亡くなってしまった。

私は読んだとき、この事実を受け止められなかった。あまりにも衝撃的なラストだったからだ。私も春樹も桜良は病気で亡くなってしまふと思っていた。だから、春樹の「彼女に残された一年という時間に甘えていた」という言葉がとても切なく感じた。

明日、生きているかなんて誰にもわからない。それなのに、あたかも生きているかのように人々は物事を後回しにした。り、伝えたいことをそのつど伝えなかつたりする。その結果、後々、後悔がおそってくることになる。

できる限り後悔しないように一秒一秒を大切にしなければならぬというこの本から学んだ。

読み終えたあと、『君の臍臓を食べたい』というタイトル

に感動し、涙を流した。最初はグロテスクなタイトルだと思
っていたが、全く違う意味が込められていた。病気を治した
桜良の切実な願い、桜良のようになりたい春樹の思い、そ
して、二人の関係をつなぐ言葉。そんな風に私はとらえた。
「君の臍臓を食べたい」この言葉に物語全てが詰まってい
ると思っ。

この本の中で「一日の価値は私も君も同じだよ」という桜
良の言葉が印象的だった。病気を患い、もうすぐ死ぬ人だっ
て、私だって、一日の価値は全部一緒ということを教えてく
れた。世界は差別をしないのだ。何をしたかの差なんかで今
日の価値は変わらない。

こんなにも前向きな桜良の性格に私も憧れるようになって
いた。

もし、私が余命を宣告されたら普通の高校生として生きて
いくだろうか。多分、「もうすぐ死ぬから」なんて言っ

りに甘えていただろう。

でも、桜良は違った。自分の死を受け止め、普通の高校生
として生きていくと選択した。「死に直面してよかったこと
といえば、毎日、生きてるって思っ

て生きるようになった」とこんな前向きな言葉も残した。

本当に多くのことを桜良からも本からも学ぶ。一秒一秒を
大切にしなければならぬこと、「後悔先に立たず」後悔す
る前に行動しなければならないこと。そして、「必ずしも明
日があるとは限らない」今、生きているのが当たり前ではな
いということ。これらを改めて感じさせてくれた。本当に命
あつての物種だと思っ。生きるって美しく、素晴らしい。

私の世界観を変えてくれたこの本。この本に出会って良か
つたと心から思っ。

当たり前ではない幸せにありがとう。